

話すこと 4

聞き手に伝わるように話していない

全 … 学級全体に対する指導や支援

個 … 個人に対する指導や支援

声の大きさや話す速さが適切でない場合

①聞き手に伝わるように話している児童を、グッドモデルとして示す。全

言語活動中に聞き手を意識して話していた児童やペアを探しておき、一旦活動を止めて、その児童に全体の前で再現させる。それを基に、聞き手に自分のことを伝える場合にどのような点に留意すれば良いかを考えさせ、具体的なポイントを児童と共通理解してから活動を再開する。

②教員とALTが話し方のグッドモデルやバッドモデルを示す。全

言語活動に入る前に、教員とALTがやり取りする様子を示す。聞き手に自分のことを伝える場合にどのような点に留意すれば良いかを、グッドモデルとバッドモデルの違いから具体的に考えさせ、ポイントを児童と共有する。

③ペアでやり取りをした後に、相互評価をする場面を設ける。全

言語活動で、自分が何を話すかに気を取られ、「どのように話すか」「聞き手に自分の話す内容が伝わったのか」まで意識できていないことが考えられる。ペアでやり取りをした際に、活動後に相互評価をする場面を設け、聞き手側に立って話し方を振り返ることができるようにする。活動の前に話し方のポイントを共有しておく、児童同士で具体的なアドバイスをすることができる。

④ペアを変えてやり取りする機会を増やす。全

様々な人とやり取りをすることで、どのように話すとより伝わるのかを児童が体験的に気付いたり、上手な人の話し方を知ったりすることができる。

⑤動画を撮影し、自分が話す姿を見る場面を設ける。全・個

自分が話している様子を確認できるように、児童同士で発表したり、やり取りしたりする様子をタブレットで撮影し合う場面を設ける。児童は動画を見ることで、声の大きさや速さ、目線、ジェスチャーなどについて自分がどうだったかを客観的に考えることができる。

目的意識が低い場合

①目的を明確にした言語活動を設定する。全

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確にすることが言語活動を設定する上で重要である。例えば、インタビュー活動をする際に、「友達に誕生日を尋ねる」と設定するのではなく、「学級の子どもの誕生日カレンダーを作るために、友達に誕生日を尋ねる」のように目的を明確にして設定することで、児童が意欲を持って言語活動を行うことができる。